



TITLE:

<大會抄録>ヒムヤル王國トゥツバ ア朝の性格について

AUTHOR(S):

部, 勇造

CITATION:

部, 勇造. <大會抄録>ヒムヤル王國トゥツバア朝の性格について. 東洋史
研究 1991, 50(3): 482-482

ISSUE DATE:

1991-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154368>

RIGHT:

材に、州アンジョマンの實態解明を試みる。まず新聞發行にまつわる基礎的データを紹介した上で、州アンジョマンの討議と活動の基本的パターン、州知事を頂點とする舊來の權力構造における州アンジョマンの法制的位置と實相、州アンジョマンと他の社會階層、社會集團との相互關係、などを取り上げる。これらの検討を通じて、立憲制施行が地域社會にもつていた意味を考えてみたい。

ヒムヤル王國トゥツバア朝の性格について

部 勇 造

前イスラーム期の南アラビアに關する傳承を記した中世のアラビア語史料によると、西曆二〇〇年前後からこの地のヒムヤル王國は、トゥツバア朝と呼ばれる強力な新王朝によって支配されていたという。從來の研究者達はこの王朝を、當時の碑銘文史料より知られる實在のヒムヤルの王朝に比定しようと試みていずれも失敗した。ところで同じく碑銘文史料によれば、まさにこの同じ時期に、紅海の對岸のアビシニアよりアクスム王國軍のアラビア半島への進出が始まっている。彼等は南アラビア諸王國間の争いに巧みに乗じて勢力を伸ばし、三世紀末に實現したヒムヤル王の南アラビア統一にも一役買ったのではないかと思われる。そこで試みに、アラビア語で傳わるトゥツバア朝の王の名を、ゲズ語で傳わる同時期のアクスム王の名と比較したところ、多くの場合前者は後者のアラビア語譯であることが判明した。つまり傳承上のトゥツバア朝の支配者

の多くは、實は歴史上のアクスム王であった譯であり、そこからイスラーム化に先立つ數世紀の間、ヒムヤルはアクスムの宗主權下に置かれていたのではないか、との假説を立てることが可能になった。本發表では、さらにこの説の傍證をいくつか挙げるとともに、このアクスム・ヒムヤル關係が、前イスラーム期の西アジア史において有する意義にも言及する。

成化朝初期における吏部權限縮小論をめぐって

阪 倉 篤 秀

成化朝の初期、四年二月御史大夫戴用によって六項目の上奏がなされた。うち三項は吏部に關わり、「精考察」と題するものは、朝覲考察において從來の吏部・都察院に加えて巡撫による實地調査をもとにした考察を並行的に行うこと、「公薦擧」では、當時吏部が掌握していた在京堂上官ならびに方面官の人事を、内閣及び各堂上官の推薦・協議に委ねること、「均爵賞」では、人事面で吏部屬官の優遇を是正するよう提言している。ここには吏部權限を抑制しようとする意圖が認められるが、それにもまして成化帝は「公薦擧」での提言内容をさらにすすめて、在京四品以上の官は皇帝特簡に、方面官については保舉制を採用するとした。これが内閣の意向を反映したものであったことはいうまでもないが、吏部にとっては權限の縮小に直接つながる重大問題であった。にもかかわらず、吏部には表立った對抗の動きは見られず、かろうじて御史大夫劉璧が